

スポーツ経験が就労意識に与える影響に関する研究

A study of the influence which sport experience gives to working consciousness

1K04B150-1

東門 達也

指導教員

主査 宮内孝知先生

副査 河西宏祐先生

目的

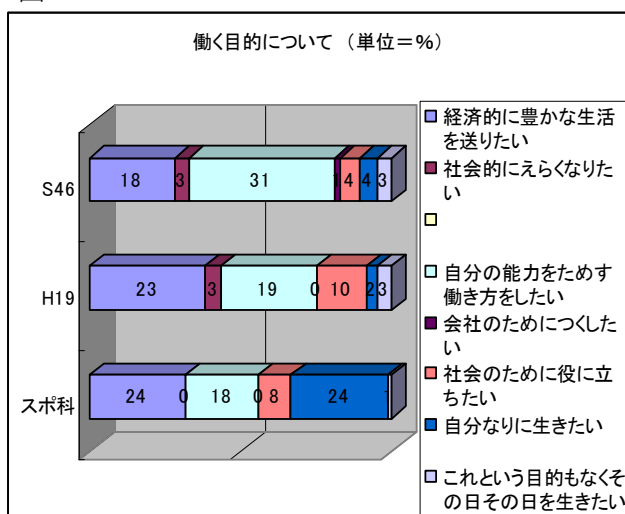
近年ではスポーツ系の学部が増えてきているが、それでも一般的の学部に比すると特異なものであると思われる。こうした学部で学び、また多様なスポーツ競技歴を有する学生が本学部には多数在籍する。ここでは学生のスポーツ経験が、就労意識に対して影響しているのか、影響しているのであればどのような影響があるのかを明らかにすることが本研究の目的である。

方法

本研究ではスポーツ科学部に所属し、スポーツ科学概論を選択する1年生323名を対象にアンケート調査を行った。質問項目は、若者を対象とした就労意識に関する既存調査から一部抜粋したもの、スポーツ経験による就労意識への影響に関して聞いたものを作成した。既存調査の結果と本調査の結果の比較から生じた差異を分析する。分析にあたって、スポーツ科学部全体としての傾向を明らかにすると同時に、その中でも特にスポーツに対する強い志向性や高い競技歴を持ち、将来も競技を継続する可能性の高い学生に焦点を当てる。そのために、自身が行ってきたスポーツの競技歴と現在のスポーツ実施状況を学生に聞き、これを抽出した。

結果

図-1



年から毎年、その年の新入社員を対象に行っている『働くことの意識調査』の中の「働く目的」をスポーツ科学部の学生にも調査した結果である。スポーツ科学部の学生は他に比べ、「自分なりに生きたい」を選択した割合が高いことが特徴となっている。また、リクルートワークス社が新卒学生を対象に行った就職観に関する調査をスポーツ科学部の学生にも聞いたところ、「卒業したらすぐに就職するのが当たり前だ」は、2001年の新卒学生で53.5%、1997年で42.8%、スポーツ科学部の学生は57.0%が選択したという結果になった。その他の項目においてはスポーツ科学部の学生と比較対象の間に明確な差が見られるもの、あまり差が見られないものがあった。

考察・結論

筆者は既存調査との比較だけでは生じた差異がスポーツ経験によるものであるか否かを明らかにすることが非常に困難であると考察した。働く目的についてスポーツ科学部では「自分なりに生きたい」を選択した学生の割合が比較対象に比べて高い結果であった。しかし、「自分なりに生きる」ために働こうと思う要因はスポーツ以外にも考えられる。また、スポーツ科学部の学生が「卒業したら社会に出て働くのが当たり前だ」を選択した割合が比較対象より高く、明確な差が生じた結果となったが、そこで生じた差がほんとうにスポーツ経験による影響であるのかを明確にするのは、困難な作業であった。筆者はスポーツ科学部の学生と比較対象の間に生じる差はもっと明確になると考えていたが、結果は曖昧なものとなった。また、「スポーツ経験による働くことへの不安・強み」の調査項目を作成する際、筆者が考えていたことは「スポーツマンの不安」といえばこういうものだ、強みといえばこういうものだ」と、「スポーツマンのステレオタイプ」を基準に選択肢を作成していた。つまり、「スポーツに関するステレオタイプ」を介さずには、スポーツ経験が就労意識に影響していたのかを判断することができなかったのである。スポーツ科学部の学生と比較対象の間に生じた差が、スポーツ経験による影響であることを明確にしうる質問項目の設定、スポーツ経験による就労意識への影響に関する質問項目の不足が本調査の反省すべき点であった。